

春の日差しが心地良いこの季節、全滅したと思っていたハマボウフウの芽が数箇所を確認された。あの津波に負けず、力強く芽吹いたハマボウフウに希望をもらった思いだ。会では今後、ハマボウフウ保護区の看板を新設し、何年かかるかはわからないが、子どもや大人が集う海岸のお花畑を復活させたいと考えている。



震災後、力強く咲いたハマボウフウの花

NPO

自分たちにできることを。被災地に物資を届ける

仙台市

山岡 講子 NPO 法人環境会議所東北

取材日

2011.5.9

地域を中心とした環境と経済の独立に向け環境ビジネスの促進を目的に活動に取り組む。毎年「エコプロダクツ東北」を開催してきたが、多くの企業が被災、会場の夢メッセみやぎも津波被害を受け閉鎖、2011年度の開催は中止に。被災した今だからこそ復興と再生には環境に配慮した環境経営の推進が必要と考え、活動に取り組んでいる。

3月11日 14時46分

山形県米沢で中小企業・大学関係者を対象とした、低炭素社会構築をテーマとするシンポジウムを開催していた。地震が起きたのは休憩中。鳥たちが一斉に飛び立ち変だなどと思った直後、何かにつかまっていないと倒れそうなほどの揺れが長く続いた。米沢は内陸部にあり地震が少なく、こんなに大きな揺れは珍しいと聞いた。館内放送とテレビでの報道で震源は宮城県沖、津波の予測は10mだった。

セミナーは中止とし、駅に向かったがすでに新幹線は不通、復旧の見込みもなくレンタカーで仙台へ帰ることにした。高速は通れないので飯坂経由で帰ることにした。両側のすべてが停電。真っ暗な道をラジオからのニュースを聞きながら走行した。道は陥没したところもある。時折の余震は走行中でもわかり、不安の中「多賀城に500人取り残されています、〇〇地区に200人取り残されています」と放送が聞こえてきた。アナウンサーの説明に『津波』という表現があまりなく、益々不安は募った。まさか内陸にまで津波が到達しているとは予想もしない。「取り残される」というのは一体どういうことなんだと見えない不安の中、



一路仙台に向かった。講師をお願いしていた吉岡先生と職員の高田と山岡、そして仙台から参加していた江成先生の4名の運命共同体だ。これが1人だったら帰ることが出来たのだろうかとぞっとする。

16時に現地を出て、仙台に着いたのは夜23時だった。仙台到着後、緑ヶ丘の江成先生が降り、向山では吉岡先生が降りることになり向山に向かった。周囲は停電で真っ暗、仙台港の火災の炎が赤々と見え、大変な事態であることを実感した。

帰宅した自宅マンションは停電で6階まで階段で昇った。懐中電灯で照らしあたりを見回すと、居間の60cmの水槽が壊れ水浸し、台所は冷蔵庫、食器棚が倒れ足の踏み場も無いすさまじい状況だった。

ライフラインの復旧まで

電気・水・ガスが止まり、12日の朝に余震を心配した息子が迎えに来た。息子のマンションは免震構造なので特に被害はなく、耐震と免震構造の違いに驚きながら避難した。

13日は自宅に戻り、息子の手を借りて冷蔵庫や食器棚を直した。ほとんどの食器は壊れ、冷蔵庫の食料は床に飛び散り、保存食やらっきょうの瓶が割れ強烈なおいが部屋中立ち込める中で片付けをした。水が出ないため拭き掃除ができない。箒とちりとりで壊れた食器を片付けた。

夕方、知人がおにぎりや惣菜、果物、水などを持ってきてくれた。反射式ストーブを使用していたので電気が無くても暖がとれ、お湯をわかし、更に料理もできた。水の消費量が多いトイレはタンクにペットボトルを入れてかさ上げした。2時間並んでも2ℓの水しか手に入らない状況の中、友人が4ℓのペットボトルを5本持ってきてくれた。飲み水は1日2ℓで足りるが生活用水は足りない。トイレの水と洗い物に苦慮した。何とか工夫をしなければと洗米後の水はバケツにため、使った食器は紙で拭き、溜まったとぎ汁で洗い、最後はトイレのタンクに入れる。トイレの紙は別にして流す時は「小」だけを使い3回に1回流す。お風呂に入れない期間はお湯をわかして体を拭き足湯にし、足湯に使った水はトイレに流す。とにかく水は無駄にできなかった。毎日していた洗髪ができない、臭いが気になりイライラする。そこで思いついたのが美顔器の蒸気。ブラシにガーゼをつけ髪に蒸気をあてながらブラッシングをする。ガーゼには汚れが付着するので取り替えてはブラッシングを繰り返す。髪はサラサラなのが気持ちが良い。4月1日にガスが通るまで繰り返した。

被災地に入って

電気が通り、テレビを見た。津波のすさまじい光景と避難所で生活している方々のニュースを見るにつけ、自分は毎日布団で寝られるだけでも幸せなのだと思った。そして何かしなくてはと考えた。じっとしてられない。いろいろなものを届けてあげたいが食糧も物もガソリンもない。震災直後はないものづくしだった。そんな中、通っている仙台福音自由教会に全国からの支援物資が届き、土曜日曜は仕分け作業を手伝った。教会では

必要としているところに届けてくださいと言われたので、4時間並んでガソリンを満タンにし、石巻、多賀城、名取、七ヶ浜に物資を届けてまわった。被災地を実際に目の当たりにした時は、言葉は出なかった。とても表現できない。

今までそこには生命があつて、営みがあつた。それが一瞬で無くなってしまった。自然の猛威の前に無力な人間であることを思い知らされる。

人間はすべて「おかげさま」で生きているにも関わらず、そこを忘れている。無理な開発を繰り返し、自然に逆らって生きてきた。エネルギー問題も声高に叫ばれて久しいが、代替のエネルギーでまかなえる生活をする事ができるのか自問自答し、我慢はいやだという身勝手さに恥じ、情けなさや無力さを感じた。やる気も消失しかけた。しかし時間が経つにつれ、多くの犠牲者の方々のためにも、生きている人間がこの大震災を忘れず、根本的にエネルギーやライフスタイルの在り方を考え直し、持続可能な社会にしなければと考えるようになった。

避難所を訪問すると、人間の持っている内面が2通りに分かれていく寂しさを感じる。リーダーがいて1つの大家族として運営しているところは、他人同士の寄り合いなのに助け合い、役割分担し、食事まかないも自分達の手で行っている。大きい避難所は土足であり衛生面も悪く、誰かがやってくれるだろうと無責任になってしまうという一面を見る。

自分たちにできることを

4月12日、支援物資を積んで南三陸へ向かった。訪問した会社は、工場も事務所も海の近くにありすべて流されていた。家族は避難所には入らず、高台にある冷蔵施設の作業場で生活している。電気も水も何も無い。それでも商品は自家発電で冷やしていた。「水がくれば商品化し、宅配が復旧



撮影：2011.4.7 南三陸町

すればネット販売ができる、1日も早く再開したい。」家も工場もないが、希望を捨てていなかった。あきらめずに希望を持ち、前に進もうとしている。逆に勇気付けられる。これから先このような企業のために自分達ができることは現場や現地での生の情報収集をし、経済を循環させるためにも全国に発信し紹介することで購入へつなげることにあると考えた。

「みちのくEMS」は今まで無理や無駄やムラがあったことを、マネジメントシステムの構築により見直すものだ。普及することが企業への啓発にもつ

ながる。また、予期せぬ天災ではない、命や安全を確保するにはどうするかを皆で研究しながら規格化・マニュアル化していくことも必要と考える。現存するすべての人々が初めての経験ではあるが、「今後も必ず起きる震災」ということを忘れてはいけない。どのような状況におかれても人間1人では生きられない。

昔はあった「講」という組織の復活が、今回の大地震により見直されたことであり、お互いに助け合う心を忘れずに相互扶助の関係を根本におき、仕組み作りをすることが大切であると痛感する。

大学 「タフなボランティア」を集めて被災地支援

仙台市

島野 智之 宮城教育大学 環境教育実践研究センター 准教授

取材日 2011.5.12

大学生のうちに自然に親しんでもらおうと野外教育・自然教育を行っている。また、世界中の研究者と連携をとりながら持続可能な開発のための教育（ESD）や環境教育の推進に取り組む。震災後は被災者支援のボランティアに加わり、気仙沼市、南三陸町などの被災地を巡り、救援物資の配給や炊き出し、風呂沸かしの作業を支えた。

3月11日 14時46分

大学の研究室で原稿を書いていた。もうそろそろおさまらだろーと思っていたら、まだまだ揺れ、普通の地震よりもとても長い気がした。外を見たら、大学の噴水がゆすったパケツのように揺れていた。研究室はとにかく本や紙のものがたくさんあるので、腰くらいまで本に埋まった。

直後は携帯もつながりそれほどでもなかったが、停電のため信号も消え、夕方になるにつれ道路は大渋滞になっていった。大学には学生50人以上が帰れず、そのまま避難していて、その夜はケアをした。

自宅では震災対策をしていたが食器類の8割が割れ、本棚はトントン相撲のように前にせり出していた。池の水を汲んできて沸かそうかと思ったくらい水は欠乏した。幸い家にあった水でまかなうことができたけれども、野菜を洗って、お皿を洗って、それをトイレに流す。そうして3回使った。たぶん沢の水を汲みに行くのが正解だったかと、今から振り返れば思う。

「タフなボランティア」を募集し被災地へ

震災3日後に、郡山の義理の兄弟を実家の富山に



疎開させた。富山ではネットが問題なく使えるので情報を集め、どこに入るかを決め、仲間呼びかけ、現場に直行した。震災から1週間程度後のことだった。

富山から直接自宅に寄り、そのまま、登米のRQ市民災害救援センター事務局に入った。RQは自分たちがやりたいことを自分たちで見つけるというボランティアセンターだ。入ってまずしたことは、このボランティアセンターで何が行われているか把握することだった。次に、自分が何に貢献できるかを周りの人たちとディスカッションしながら考え、次の日のスケジュールを決めた。